

に敬台寺を建立した。

(詳細は拙稿「敬台院殿の徳島敬台寺開創に関する一考察」
『富士学報』第四十五号参照)

近世日蓮宗の寺檀制度再考

坂輪 宣政

従来の研究では寛文十一年に始まる宗門改め制度を通じて寺檀の関係に大きな変化があったと考え、その後の寺檀関係が研究されてきた。辻善之助による以前の通説はこの「システムをもととした寺院と檀家の関係」の寺檀制度を近世仏教の中心にすえて、すべてを見通すような検討を行った。またその通説では寺檀制度によって公権力に守られ権威を背景として民衆に君臨する寺や僧侶の像があった。近年否定されてきているし筆者も賛同するが、実際の寺と檀家の関係からみれば概観としても妥当ではないのは明瞭である。

ここでは岡山藩の事例を足がかりに、宗門改めに付随する寺檀制度は、特に日蓮宗では、いわば本来の寺檀関係と並行するだけの行政的な関係であり、本来の寺檀関係を変容させるほどのものではなかったのではないかと、という問題提起を行いたい。近世仏教史は年代、地域、個別の寺院の事情などが種々異なると大きな相違があり一概にはいえないのが当然である。しかし日蓮宗の信仰を見ると主体的に信仰を選択してゆくことは中世以来共通しているように思われる。宗旨争論の事例でも日蓮宗は目立つ。婚姻でも同宗旨を選ぶ傾向がある。また移住による菩提寺変更の際しても宗旨変更が非常に少ないなどの研究

もなされている。藩内では檀家が宗門改めより信仰を優先させた事例も時折ある。

結局、中世以来の信仰的な理由によってのみ結びついていた寺檀関係が、近世中期に導入された行政制度としてのシステムとしての寺檀関係と並行的に同時に存在するようになったと表現すべきではなからうか。そして日蓮宗信徒においては宗門改めという制度がそれほど重要ではなく、あくまで信仰が主であり幕府や藩の制度や法令はまた別の価値をもって受け止められていた、という推測である。なお村落自治と信仰などの問題も重要であるがここでは取り上げず後考することとしたい。

システムの一部としての寺院は藩から行政機関の一環と認識されることもあった。宗門改めを行うことが岡山藩では寺院から藩主への「奉公」と表現されることもある。藩による住職就任拒否理由は行政的な理由によるものであり、宗教的な事由は優先されず、藩は宗教的なことに関しては埒外であり関与しない方針を徹底していた。

寺檀関係の一面として、住職の在任年数も影響があったであろう。例えば幕末期の江戸ではおおむね数年で別の寺院へ転任してゆく場合が多いことが確認されている。近世中期以降の岡山藩内では在地村落の末寺は長期に同じ寺に住職することもあるが短期間の場合もあり、城下の門流触頭寺院では住職は比較的短期間で交代している。長期間にわたって同一寺院の住職を務める現代とは異なり結果的に檀家の寺院への関与が強かったことも注目すべきであろう。住職の任命は本山によるが、実際は在地の人々が希望した僧がそのまま任命されることもよくあ

った。逆にそれが藩によって拒否される場合もあった。なお、住職交代に際しては檀家が立ち会い、寺の什物や財産の確認引継をしていった。住職は財産を単独では処分できなかった。そして住職が信仰上などの理由で檀家から忌避され布施を拒否されたりして(例として宝暦年間などの諸例や延享二年の吉田村蓮光寺など)出寺する例も散見される。これらの事例では宗門改めの制約は檀中からは無視されている。また寺が経済的に困窮して破綻し住職が退寺する例も近世後期にはままある。これらも辻説の上下関係にもとづく寺院・僧侶像からはずれるものである。

仮説としてであるが、日蓮宗の寺檀関係は中世以来の伝統が中心として存続していたと考えるべきであり、後発のシステムとしての寺檀制度はその中核を変容させるほど影響をもつものではなかったのではないか、という観点から今後の検討を進めたい。

書肆・加賀屋善蔵と日蓮聖人伝の出版

堀部 正円

【一はじめに】近世における日蓮宗関係書の出版事情については、冠賢一氏によって詳細な研究が披瀝されている。とりわけ、「法華宗門書堂」を名乗った村上勘兵衛については、寺院や旧家所蔵文書によってかなり詳細な動向が描写されている(『近世日蓮宗出版史研究』など)。しかし、日蓮宗関係書の刊行が数百点に垂んとする中で、村上勘兵衛以外にも多くの書肆が関係している事実が存する。本発表では、その中でも江戸時

代後期に活動が見られる書肆・加賀屋善蔵について、特に日蓮聖人伝の出版事情を概観して、同書肆を研究の俎上に載せることを第一の目的とする。

【二加賀屋善蔵について】大坂の書肆・加賀屋善蔵は、堂号を松根堂といい、本名は吉田姓である。加賀屋善蔵についての先行研究は皆無であるが、『日本古典籍書誌学辞典』には「加賀屋善蔵」の項目が存在し、簡潔ながら解説されている。内容を簡条で列記すると、①出版は天明以降②教養本・宗教本が多い③所在は数回の移転が見られる④明治四年頃が最後の出版、との指摘が見られる。このうち改めておくべき内容として、④は明治以降も「吉田善蔵(造)」や「加々善吉田書店」などとして明治・大正時代に出版された書籍が多数確認されるほか、湯川松次郎氏の調査によれば、明治末年頃に心齋橋筋備後町での店舗の存在を伝えている(「明治四二・三年頃の心齋橋中心の大坂の本屋」)。もう一点、新たに指摘しておくべきことは、多くの日蓮宗関係書を刊行していることである。近世初期の「法華宗門書堂」は前述冠賢の研究によって、村上勘兵衛ら四書肆による経営が指摘されている。後には村上勘兵衛単独で「法華宗門書堂」を名乗るが、例えば文政五(一八二二)年刊行の『温泉遊草』には、「法華宗門書堂」に加賀屋善蔵も併記されている。加賀屋善蔵は多くの日蓮宗関係書の刊行に携わっていることが確認されるが、これらは概ね村上勘兵衛との相版によるものである。筆者は加賀屋善蔵による日蓮宗関係書の刊行については、村上勘兵衛との密接な関係が背景にあったと考えている。